

沖縄県における海洋危険生物刺咬症被害の疫学調査 (2024 年)

宮城綾乃・安座間安仙・古謝あゆ子

Epidemiology of Injury by Marine Animals in Okinawa Prefecture (2024)

Ayano MIYAGI, Yasuhito AZAMA and Ayuko KOJA

要旨：「ハブクラゲ等危害防止対策事務処理要領」に基づき、2024年に報告された「海洋危険生物刺咬症事故調査票」を集計し、海洋危険生物による刺咬症被害の状況をまとめた。2024年の海洋危険生物による刺咬症被害は126件で、2023年の100件と比較すると26件増加した。被害総数126件のうち、ハブクラゲによる刺咬症被害が37件(29.4%)と最も多く、次いでカツオノエボシが17件(13.5%)であった。被害が最も多く発生した月は7月で、42件(33.3%)の報告があった。2024年における県外在住者の被害は53件(42.1%)であり、県内在住者の被害50件(39.7%)を上回っていた。被害報告数が増加した理由の一つとして、沖縄県入域観光客数の増加による影響が考えられた。

Key words：海洋危険生物、刺咬症被害、疫学、ハブクラゲ、観光客、沖縄県

I はじめに

沖縄県ではハブクラゲ等海洋危険生物による危害を未然に防止するため、1998年に「ハブクラゲ等危害防止対策事務処理要領」が制定された。同要領に基づき2024年に報告された県内の海洋危険生物による刺咬症被害の状況について報告する。

II 方法

「ハブクラゲ等危害防止対策事務処理要領」に基づき、2024年1月1日から12月31日までに沖縄県内の医療機関及び監視機関から報告された「海洋危険生物刺咬症事故調査票」を集計した。加害生物名は、調査票に記載のあった生物名で集計を行い、集計には「疑い」と報告されたものも含めた。標準和名で報告されていない生物については、報告された名称に「類」をつけてまとめて集計した。なお、構成比の数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、個々の集計値の合計は必ずしも100%にならない場合がある。

III 結果及び考察

2024年に報告された海洋危険生物による刺咬症被害は126件だった(表1)。2023年の刺咬症被害報告数100件と比較すると26件増加した。ハブクラゲ *Chironex yamaguchii* による刺咬症被害は37件報告されており、2023年の35件より2件増加した。

1. 発生時期

刺咬症被害は3月から11月にかけて発生しており、1月、2月及び12月は被害報告がなかった(表1)。被害が最も多かったのは7月で、42件(33.3%)の報告があっ

た。刺咬症被害は例年7月から8月に多く発生しており、この2ヶ月の被害が年間全体の約70%を占めていたが²⁾、2024年の7月と8月の被害報告数は合計65件(51.6%)であった。

2. 発生場所

被害が最も多かったのは宮古保健所管轄内で、45件(35.7%)の報告があった。次いで北部保健所管轄内の44件(34.9%)、中部保健所管轄内の21件(16.7%)、南部保健所管轄内(那覇市を含む)の8件(6.3%)、八重山保健所管轄内の8件(6.3%)であった(表1)。

市町村別で10件以上の被害報告があったのは、宮古島市、名護市及びうるま市で、宮古島市が45件(35.7%)、名護市が16件(12.7%)、うるま市が12件(9.5%)であった(表1)。

3. 被害者の概要

被害総数126件のうち、男性の被害が81件(64.3%)、女性の被害が45件(35.7%)であった(表2)。

年代別では10代の被害が最も多く31件(24.6%)、次いで20代の30件(23.8%)、10歳未満の28件(22.2%)、30代の15件(11.9%)、40代の13件(10.3%)、50代の6件(4.8%)、60代以上の3件(2.4%)であった(表2)。

4. 加害生物と被害の重症度

加害生物別では、刺胞動物による被害が70件(55.6%)と最も多く、そのうちハブクラゲによる被害は37件(29.4%)で、次いでカツオノエボシ *Physalia* sp.による被害が17件(13.5%)、クラゲ類による被害が14件(11.1%)、イソギンチャク類による被害が2件(1.6%)報告された(表3)。

魚類では20件(15.9%)の被害があり、オコゼ類で10

表1. 沖縄県における海洋危険生物による市町村別月別の刺咬症被害報告数 (2024年) . ()内はハブクラゲによる件数.

管轄保健所	市町村	月												合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
北部保健所	名護市	0	0	1	0	4	0	4(3)	4(3)	2(1)	1(1)	0	0	16(8)
	国頭村	0	0	0	0	0	0	6(4)	0	0	0	0	0	6(4)
	大宜味村	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	1	1	0	3(1)
	東村	0	0	0	0	0	0	0	2(1)	0	0	0	0	2(1)
	今帰仁村	0	0	0	0	0	1	2	2	1	0	1	0	7
	本部町	0	0	0	1(1)	0	1	1	2(1)	2	0	0	0	7(2)
	不明	0	0	0	0	0	0	1(1)	1	0	1	0	0	3(1)
	小計	0	0	1	1	4	2	15(9)	11(5)	5(1)	3(1)	2	0	44(17)
中部保健所	沖縄市	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	うるま市	0	0	0	0	0	0	6(3)	6(6)	0	0	0	0	12(9)
	恩納村	0	0	0	0	0	0	4(2)	0	0	1	0	0	5(2)
	宜野座村	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)
	読谷村	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	北谷町	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	小計	0	0	2	0	0	0	10(5)	8(7)	0	1	0	0	21(12)
南部保健所	那覇市	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	1(1)
	豊見城市	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)
	渡嘉敷村	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0	4
	粟国村	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	小計	0	0	1	0	0	0	0	1(1)	4(1)	2	0	0	8(2)
宮古保健所	宮古島市	0	0	2	2	1	13(4)	15	2	5	2	3	0	45(4)
八重山保健所	石垣市	0	0	0	0	0	2(1)	1	0	0	0	0	0	3(1)
	竹富町	0	0	0	0	0	2	1	1(1)	1	0	0	0	5(1)
	小計	0	0	0	0	0	4(1)	2	1(1)	1	0	0	0	8(2)
合計		0	0	6	3(1)	5	19(5)	42(14)	23(14)	15(2)	8(1)	5	0	126(37)

表2. 沖縄県における海洋危険生物による性別年代別の刺咬症被害報告数 (2024年) .

性別	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
男	17	18	17	12	9	6	2	81
女	11	13	13	3	4	0	1	45
合計	28	31	30	15	13	6	3	126

件 (7.9%), オニダルマオコゼ *Synanceia verrucosa* で4件 (3.2%), ミノカサゴ類及びネムリブカ *Triadenodon obesus* で各2件 (1.6%), オニオコゼ *Inimicus japonicus* 及びアカエイ *Hemitrygon akajei* で各1件 (0.8%) の報告があった (表3) .

棘皮動物では7件 (5.6%) の被害があり, ガンガゼ *Diadema setosum* で5件 (4.0%), ウニ類で2件 (1.6%) であった. 爬虫類では2件 (1.6%) の被害があり, クロガシラウミヘビ *Hydrophis melanocephalus* 及びウミヘビ類で各1件 (0.8%) であった. 軟体動物 (イモガイ類) 及び環形動物 (ウミケムシ類) では, 各1件 (0.8%) の被害があった. また, 加害生物不明の被害は25件 (19.8%) であった (表3) .

被害の重症度は, 軽症が97件 (77.0%), 中等症が10件 (7.9%), 重症度不明が19件 (15.1%) で, 重症事例はなかった (表4). 中等症の加害生物は, クラゲ類が2

件, オニダルマオコゼが1件, オコゼ類が3件, ネムリブカが2件, クロガシラウミヘビが1件, 不明が1件であった.

5. ハブクラゲによる刺症被害

2024年のハブクラゲによる刺症被害は37件報告された. 被害は4月から10月にかけて発生し, 最も多い7月と8月には各14件の報告があった (表1) . 最も早い被害報告日は本部町の4月1日であり, 最も遅い報告日は名護市の10月5日であった.

また, 市町村別のハブクラゲ被害報告数は, うるま市で9件, 名護市で8件, 国頭村及び宮古島市で各4件, 本部町及び恩納村で各2件, 大宜味村, 東村, 宜野座村, 那覇市, 豊見城市, 石垣市及び竹富町で各1件であった (表1) .

6. 被害者の行動

被害時の行動は, 遊泳が97件 (77.0%) と最も多く, 次いでその他が16件 (12.7%), ダイビング及び漁労中が各4件 (3.2%), 魚釣りが3件 (2.4%), 潮干狩りが2件 (1.6%) であった (表5) .

遊泳中の被害で10件以上報告があった加害生物は, ハブクラゲが33件と最も多く, 次いでカツオノエボシ及びクラゲ類が各14件であった (表5) .

表3. 沖縄県における海洋危険生物による加害生物別月別の刺咬症被害報告数 (2024年) .

加害生物	月												合計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
刺胞動物	ハブクラゲ	0	0	0	1	0	5	14	14	2	1	0	0	37
	カツオノエボシ	0	0	0	1	0	6	5	0	1	0	4	0	17
	クラゲ類	0	0	0	0	0	5	6	2	0	1	0	0	14
	イソギンチャク類	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
	小計	0	0	1	2	0	16	25	16	4	2	4	0	70
魚類	オニダルマオコゼ	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	4
	オニオコゼ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	オコゼ類	0	0	1	0	2	0	2	1	2	2	0	0	10
	ミノカサゴ類	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
	ネムリブカ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	アカエイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	小計	0	0	1	0	4	0	2	4	7	2	0	0	20
棘皮動物	ガンガゼ	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	5
	ウニ類	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
	小計	0	0	1	0	0	1	2	1	1	1	0	0	7
爬虫類	クロガシラウミヘビ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	ウミヘビ類	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	小計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2
軟体動物	イモガイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
環形動物	ウミケムシ類	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
不明		0	0	2	1	1	1	13	2	3	1	1	0	25
合計		0	0	6	3	5	19	42	23	15	8	5	0	126

表4. 沖縄県における海洋危険生物による加害生物別重症度別の刺咬症被害報告数 (2024年) .

加害生物	重症度				合計	
	軽症	中等症	重症	不明		
刺胞動物	ハブクラゲ	28	0	0	9	37
	カツオノエボシ	16	0	0	1	17
	クラゲ類	12	2	0	0	14
	イソギンチャク類	1	0	0	1	2
	小計	57	2	0	11	70
魚類	オニダルマオコゼ	3	1	0	0	4
	オニオコゼ	0	0	0	1	1
	オコゼ類	6	3	0	1	10
	ミノカサゴ類	2	0	0	0	2
	ネムリブカ	0	2	0	0	2
	アカエイ	1	0	0	0	1
	小計	12	6	0	2	20
棘皮動物	ガンガゼ	4	0	0	1	5
	ウニ類	2	0	0	0	2
	小計	6	0	0	1	7
爬虫類	クロガシラウミヘビ	0	1	0	0	1
	ウミヘビ類	0	0	0	1	1
	小計	0	1	0	1	2
軟体動物	イモガイ類	1	0	0	0	1
環形動物	ウミケムシ類	1	0	0	0	1
不明		20	1	0	4	25
合計		97	10	0	19	126

7. 海洋危険生物に関する知識の有無

県内在住の被害者 50 名のうち、海洋危険生物に関する「知識が有る」と回答した人は 21 名、「知識が無い」と回答した人は 18 名、回答不明が 11 名で、「知識が有る」人の割合は 42.0%であった (図 1) . 一方、県外在住の被害者 53 名のうち、「知識が有る」と回答した人は 7 名で、

「知識が無い」と回答した人は 36 名、回答不明が 10 名で、「知識が有る」人の割合は 13.2%であった (図 1) . 県外在住者は約 7 割が「知識が無い」と回答しており、県内在住者と比較して海洋危険生物に関する認知度が低いことが分かった.

知識が不十分な状態で海に入ると、刺咬症予防や応急処置の準備が不足してしまい、被害に遭う可能性が高くなると考えられる. 気候が温暖な沖縄県の海には、県外の海では見られない危険生物も生息していることから、来県する県外在住者 (主に観光客) にも注意喚起ができるような啓発方法についても検討していく必要がある.

8. 観光客の被害報告数について

今帰仁村、恩納村、読谷村、那覇市、渡嘉敷村、粟国村、宮古島市、石垣市及び竹富町では、県内在住者よりも県外在住者の被害が多く報告された. 宮古島市で 45 件中 28 件 (62.2%)、今帰仁村で 7 件中 4 件 (57.1%)、恩納村及び竹富町で 5 件中 3 件 (60.0%)、渡嘉敷村で 4 件中 3 件 (75.0%)、石垣市で 3 件中 2 件 (66.7%) 読谷村、那覇市及び粟国村で 1 件中 1 件 (100.0%) が県外在住者の被害であった (表 6) . これらの地域では、県外在住者 (主に観光客) へ向けた注意喚起にも努める必要がある.

9. 2024 年の海洋危険生物刺咬症被害の特徴

2024 年の刺咬症被害報告数は 126 件で、2023 年の 100 件と比べると 26 件増加した¹⁾. 2021 年から 2023 年にか

表5. 沖縄県における海洋危険生物による加害生物別被害時の行動別の刺咬症被害報告数 (2024年) .

加害生物	被害時の行動						合計	
	遊泳	魚釣り	ダイビング (潜水)	漁労中	潮干狩り	その他		
刺胞動物	ハブクラゲ	33	1	1	0	0	2	37
	カツオノエボシ	14	0	1	0	0	2	17
	クラゲ類	14	0	0	0	0	0	14
	イソギンチャク類	2	0	0	0	0	0	2
	小計	63	1	2	0	0	4	70
魚類	オニダルマオコゼ	3	0	0	0	0	1	4
	オニオコゼ	1	0	0	0	0	0	1
	オコゼ類	5	0	0	0	0	5	10
	ミノカサゴ類	0	1	0	1	0	0	2
	ネムリブカ	0	0	2	0	0	0	2
	アカエイ	1	0	0	0	0	0	1
	小計	10	1	2	1	0	6	20
棘皮動物	ガンガゼ	3	0	0	0	0	2	5
	ウニ類	1	0	0	0	0	1	2
	小計	4	0	0	0	0	3	7
爬虫類	クロガシラウミヘビ	0	0	0	1	0	0	1
	ウミヘビ類	0	1	0	0	0	0	1
	小計	0	1	0	1	0	0	2
軟体動物	イモガイ類	0	0	0	0	1	0	1
環形動物	ウミケムシ類	0	0	0	0	1	0	1
不明		20	0	0	2	0	3	25
合計		97	3	4	4	2	16	126

表6. 沖縄県における海洋危険生物による市町村別被害者の在住地別の刺咬症被害報告数 (2024年) .

管轄保健所	市町村	被害者の在住地			合計
		県内	県外	不明	
北部保健所	名護市	5	3	8	16
	国頭村	2	0	4	6
	大宜味村	1	0	2	3
	東村	0	0	2	2
	今帰仁村	1	4	2	7
	本部町	4	2	1	7
	不明	0	1	2	3
	小計	13	10	21	44
中部保健所	沖縄市	1	0	0	1
	うるま市	11	1	0	12
	恩納村	2	3	0	5
	宜野座村	0	0	1	1
	読谷村	0	1	0	1
	北谷町	1	0	0	1
	小計	15	5	1	21
南部保健所	那覇市	0	1	0	1
	豊見城市	1	0	0	1
	渡嘉敷村	1	3	0	4
	粟国村	0	1	0	1
	不明	1	0	0	1
小計	3	5	0	8	
宮古保健所	宮古島市	17	28	0	45
八重山保健所	石垣市	1	2	0	3
	竹富町	1	3	1	5
	小計	2	5	1	8
合計		50	53	23	126

けての被害報告数は、新型コロナウイルス感染症や台風の影響により 100 件程度で推移していた²⁾。2024 年につ

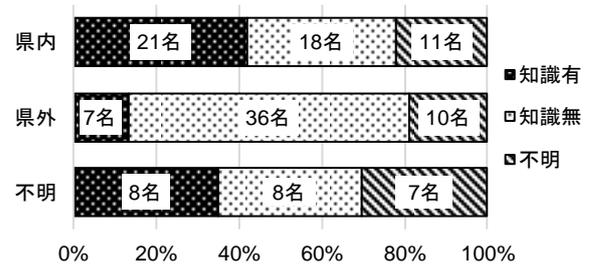


図1. 沖縄県における被害者の在住地別海洋危険生物に関する知識の有無 (2024年) .

いては、夏季の台風襲来等がなく、前年と比較して 26 件増加する結果となった。

被害報告数が増加した理由の一つとして、沖縄県入域観光客数の増加による影響が考えられる。2024 年の入域観光客数は 966 万 8,800 人で、これまで最多を記録した 2019 年に対し 95.1% の水準まで回復した³⁾。特に夏期 (7-9 月) にかけては、多くの観光客が海水浴やマリンスポーツを目的に来県しており⁴⁾、海に入る人が多く、前年より被害報告数が増加したと考えられる。

刺咬症被害の発生時期については、例年 7-8 月に多く発生しており、この 2 ヶ月の被害が年間全体の約 70% を占めていたが²⁾、2024 年の 7-8 月の被害報告数は計 65 件 (51.6%) であり、全体における割合が例年より低くなっていた。理由として、2024 年は 4-11 月にかけて平年より平均気温が高い状態が続いていたため⁵⁾、海水浴が

できる期間も長くなり、6月や9月の被害割合が例年と比較して高くなったことが考えられる。

2025年の刺咬症被害報告数については、2025年4-8月の入域観光客数が前年比で増加していること及び同年8-9月に沖縄本島地方に接近した台風がなかったことから^{6,7)}、海に入る人が増えると予想され、2024年よりも増加する可能性がある。

＜謝辞＞

本調査を実施するにあたり、情報提供にご協力いただいた医療機関及び監視機関の方々、情報収集にご協力いただいた市町村及び保健所の方々に深謝いたします。

IV 参考文献

- 1) 安座間安仙・宮城綾乃・古謝あゆ子 (2024) 沖縄県における2023年の海洋危険生物刺咬症被害の疫学調査. 沖縄県衛生環境研究所報, 58: 93-96.
- 2) 沖縄県衛生環境研究所 (2024) 沖縄県における海洋危険生物刺咬症被害発生状況 (1998~2024年). <https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/005/069/1998-2024_higai.pdf>. 2025年10月アクセス.
- 3) 沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課 (2025) 令和6年(暦年)沖縄県入域観光客統計概況. <https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/026/300/r6-rekinenn-gaikyou-kakutei1.pdf>. 2025年10月アクセス.
- 4) 沖縄県文化観光スポーツ部 (2024) 令和5年度観光統計実態調査報告書(1). <https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/031/866/r5houkokusyo_1.pdf>. 2025年10月アクセス.
- 5) 沖縄気象台 (2025) 沖縄地方顕著現象報告(令和6年1月~12月). 第53号, pp.1-5. <<https://www.jma-net.go.jp/okinawa/data/kencho/2024/2024.pdf>>. 2025年10月アクセス.
- 6) 沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課 (2025) 令和7年(2025)8月入域観光客数概況(速報). <https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/026/300/r7-8gaikyou-sokuhou.pdf>. 2025年10月アクセス.
- 7) 台風8・9月本島接近ゼロ. 沖縄タイムス, 2025年9月30日, 日刊, p.1